

29年間の宣教師生活を回顧して

牧野 直之

〈53号の続きを掲載します。(2004年4月12日、JOMA総会での講演)〉

3. 宣教師として考えさせられたこと

A. 言語

1974年、タイに到着しました。まずOMFから命じられたことは、タイ語の学びをしっかりとやること、その為に伝道・宣教活動はひかえることです。OMFはタイ語の話す、書く、読む、を3年間で学ぶシステムを作っていました。初めの一年はタイ語学校で学びます。しかし、これもタイ語学校にまかせきりではなく、3ヶ月に一度、OMFの語学コンサルタントとの面接があり、学校の学びで不足している所を補っていきます。又、ある時は一ヶ月休んでOMFの語学センターで学び、再び学校の学びに復帰するとか、小さい子供のいる母親は学校と同じ学びをOMF語学センターでタイ人の個人教授について学ぶとか、様々なバリエーションがありました。

私たちは日本人ですので、英語を母国語とする人達とは違った発音の問題があります。そこで私たちはタイ語学校での学びを2/3で止め、最後は個人教授について、

私たちの弱いところを矯正しました。

2年目からは英語も日本語も使えない、タイの中央部に移り、伝道の働き50%、言語の学び50%という具合で学びました。学ぶカリキュラムが決まっています、3ヶ月に1度、首都バンコクのOMF語学センターに行き、テストを受けます。9ヶ月の終わりにある3回目のテストは、2年目で学んだこと全部をチェックするもので、2時間位かかります。この成績次第で3年目のカリキュラムに進めるかどうかが決まります。

このように非常にしっかりしたタイ語学習システムがあったことを、私は感謝しております。今でも、タイ語が読め、書け、話せるのはこの3年間の厳しい訓練のお陰だと思っています。特に言語コンサルタントの存在が大きいのと思います。タイ人は私がちょっとタイ語を話すと「上手、上手」と言います。しかし、コンサルタントは「どこが悪いか、どのように悪いか、そしてどのように矯正すべきか」を教えてくださいました。

現地の言葉を学ぶことは非常に大切なことは言うまでもありません。と同時に、英語も大切であると思っています。

世界宣教の働きを 19 世紀から担って来たのは、西洋人のクリスチャンと教会です。特にイギリス人とアメリカ人の働きは大きく、現在でも多くの宣教師がこの 2 国から送り出されています。その関係で、英語が宣教師間の、又、宣教団体間のコミュニケーションの手段となっています。確かに 20 世紀の後半からアジア人の宣教師が急速に増えて来ています。しかし、インド人の宣教師と韓国人の宣教師がコミュニケーションを取るには、やはり英語を使うこととなります。このように英語は今や国際共通語になりました。ですから、日本人の宣教師たちも英語で必要かつ十分なコミュニケーションが出来るようになることが大切です。さもないと日本人宣教師が孤立してしまい、又、ひとりよがりになってしまい、賜物を活かして神の教会を建て上げることができません。

英語を学ぶもう一つの効用は、日本人宣教師候補者に英語を学んで準備をして頂くことによって、他の言語を学ぶ能力の有無を察することができることです。OMF では宣教師志願者に英国に行って、だいたい 1 年英語を学んでもらいます。そうしますと、その人の外国語取得能力の目安が分ります。この目安に従って、宣教地も考えることができます。

B. 異文化調整

この頃は様々なところで「カルチャー・ショック」ということが言われます。カルチャー・ショックは異なった文化の中で生活した時に起こる不具合です。病気になる人もいますし、人間関係を損なう人もいます。

私たちは初めの一年、タイ語学校で学んでいる時は、西洋人の OMF 宣教師たちと一軒の家で共同生活をしていました。皆、タイ語の学びをしていましたし、タイの文化に慣れるのに苦労していました。その上、OMF という団体のやり方に慣れる必要があり、お互いの文化も違いま

すから、その調整もありました。そうすると、ちょっとしたことで誤解したり、されたりして、関係が気まづくなりました。私たちのタイ語の学びは比較的順調に進んで行きました。そうすると日本語とタイ語は似ているのだとか、アジア人はアジアの言葉を話し易いのだ、と誤解されました。又、ちょっとした発言や助言が優越感から出ているように取られたりしましたから、気をつけなければなりません。しかし、私たちもカルチャー・ショックというか文化調整をしている最中ですから余裕がありません。「なんだよ、僕達は毎日必死に練習し、勉強しているんだよ。あいつらだってもっとまじめにやればいいんだ。」なんて、心の中で反発したりして、人間関係がギクシャクしてしまいました。

カルチャー・ショックの一番やっかいなところは、一番は正常だ、カルチャー・ショックなんてないと自覚症状がないところです。しかし周りの者たちの目には、特に、もう何年も異文化の中で生活している者たちの目には直ぐに分ります。

いくつかの特徴的な症状を挙げてみましょう。それらは基本的に罪人の性質が突出して出ることです。 1) 自分の国のものが良い、と主張する。 2) 自分のやり方、方法が良い、と主張する。 3) 自分の考えが賢く、現地の人の考えはバカげて愚かだ、と思える。 4) イライラして気持が落ち着かないので、すぐに怒る。 5) 食欲が落ち、日本食（日本で今までそんなに食べなかったものが）ほしくなる。 6) 眠れない。 7) 怒らない人は逆に落ち込む。

私も自分がカルチャー・ショックになったという自覚症状はありませんでした。しかし、タイ語を 6 ヶ月間学んだ後、1 ヶ月の休みを取りました。(OMF のシステム) この中、2 週間はチェンマイにありました OMF の休暇の施設で休みました。ところが乗り合いタクシーに 2 週間分の食糧を積んでチェンマイ市が一望できる

山の家に行く途中に、車の中で吐きそうになりました。胃炎になり、結局2週間おかゆ以外は食べられず、10キロ近くやせてしまいました。6ヶ月間異文化調整の中でストレスが蓄積し、休みだということでホッとした時に、その疲れが出て胃炎になったのです。これは本当に人には言えん苦しみでした。

C. 宣教の姿勢

この2週間山の家で休んでいる時に、BBCのニュースで、ヴェトナム、ラオス、カンボジアの共産化を知りました。その頃アメリカ人の宣教団体はドミノ理論で次はタイが共産化する。タイ語なんて学んでいても意味がない、直ぐに伝道しなければもう福音を伝える機会がなくなる、と言って、ラオス、カンボジア国境地帯に移ってトラクトを大量に自動車から投棄するという方法で働きました。又、この時期にアメリカから反共を強く前面に出すキリスト教団体が入ってきました。

私は宣教の姿勢ということを考えさせられました。私たちはOMFというアメリカ人もいますが、多くの国々からの宣教師がいる国際的な団体で、中国での経験から政治的な活動や関係を派遣国や宣教国と結びません。しかし、多くのアメリカからの宣教団体やキリスト教団体、特に福音派のグループは、政治的な係りを持って宣教をしています。そしてそのような団体は財力があり、お金にものを言わせて、自分達の考えている宣教、自分たちの意向に沿った教会堂を建て、教会の働きをしました。このような上から下への宣教姿勢、現地の人々の意向や文化を無視し、宣教師の価値観に従った宣教活動というのは、アメリカ人によって進められました。特にタイでは、ヴェトナム戦争時代に始まり、カンボジア、ヴェトナム難民がタイに流入する1980年代まで続きました。

私が残念に思うのは、このような宣教

師の姿勢が、1980年代からはアジア人の宣教師たちにも無批判のまま受け継がれていることです。

D. 宣教師評価をどのようにするか

アメリカ人の宣教師たちは派遣教会、支援団体の評価によって左右されているようです。派遣教会がこの宣教師は派遣するに値しないと評価をすれば、たとえ宣教師が望んでも、宣教地に戻る事が出来ません。アメリカ人の場合、この評価は支援献金という形であらわされると考えるようです。つまり、宣教師に支援献金が十分に与えられているということは、その宣教師の働きは評価されているということです。そこでアメリカ人宣教師は支援献金が得られるような働き、又、成果を挙げるといことが第一になります。宣教地のニーズに応える働き、宣教地に聖書の教えに従った教会を建てるよりも、本国の教会に理解され、高い評価を得る働きをします。

これはアメリカ人だけではなく、多くの西洋人宣教師たち、最近ではシンガポール人、韓国人をはじめアジア人の宣教師も同様に評価しているようです。

OMFでは2年に1度宣教地にいるOMFのリーダーと宣教師とによって、その宣教師の評価をします。この評価には現地人協力者の評価も加えられます。現地語習得の達成度、健康診断に基づくOMFの医者の評価と支援献金の状況も考慮に入れられます。

この定期的な評価が宣教地、国際本部、派遣国のOMFのリーダーに報告されます。

私はOMFの実施してきている評価制度の中で現地人協力者の評価を加える点をとっても良い点だと思っております。と言いますのは、私の経験からも宣教師の同僚、つまり外国人から見た宣教師の姿と、現地の人から見た宣教師の姿は大分違うからです。現地のクリスチャン達はよほどのことがない限り、宣教師たちの評価を本音で

は言いません。特に宣教師達によって宣教地の教会や団体が財政的に支えられているならば、賛辞は述べても否定的な批判や非難は絶対に出て来ません。

悲しいことですが、タイには外国人（アジア人も含めて）の宣教師によって建てられた風化しつつある遺骸のような教会堂や施設があります。

E. 子供の教育

宣教の働きはコンスタントに長い間継続していく働きです。宣教地で10年、20年と働いていくと、当然出て来る問題は、宣教師の子供の教育の問題です。OMFを始めたハドソン・テラーは19世紀にこのことに気付き、自分の子供達が学齢期にになった時、イギリスに送り帰しました。その後山東省のチーフーという所にOMFの学校を建て、そこで宣教師の子供達の教育をしました。中国が共産化した後は、マレーシアとフィリピン、後に日本の函館郊外に全寮制の学校を建て、宣教師子弟の教育をしました。中国が共産化した後は、マレーシアとフィリピン、後に日本の函館郊外にも全寮制の学校を建て、宣教師子弟の教育をして来ました。ところが1990年代に入り、北米からの宣教師を中心に、親元で子供の教育をすることを求める人々が増え、OMFは自前の学校を閉鎖し、(日)全寮制のクリスチャンの学校で教育する。(月)地元のインターナショナルスクールで教育する。(火)現地の学校で教育する。(水)ホーム・スクーリングにする、と4つのオプションをもって子供の教育の必要に応えています。

OMFの全寮制の学校を止めたために、いくつかの大きな変化が起こりました。

- 1) 長期宣教師としてOMFに入る人が減り、短期宣教師（3年以内）が急激に増えた。
- 2) クリスチャンの英語による学校（例CAJ）の周辺で働く宣教師が増え、伝道が必要な所に行く宣教師が少なくなった。

日本の宣教師たちもこの問題を考えていく必要があると思います。現在はJOMAでMK教育のセミナーをしても、諸教会の関心は低く、子供のいる宣教師たちが自分たちの問題として考えている段階です。

私個人としては、日本人宣教師を送り出している諸団体が協力して、宣教師の子供たちを引き受ける、寮のような家を様々な教育オプションが可能な地域に持つことがよいのではないかと考えています。

F. 宣教師と宣教学者

宣教師として宣教の雑誌や宣教学の本などを読み、学んでいくことはとても大切なことです。クリスチャンの見地から書かれた物だけではなく、文化人類学の本なども文化の理解に新しい光を与えてくれます。

このような本を読んでいく中に気づくことですが、多くの本は余り現地の様子や状態、そしてニーズを知らずに書かれているということです。私たちはタイの人たちと一緒に生活し、生活の中からタイ人を見、彼らの必要を見、肌で感じて生きてきました。ところが多くの本は、しばしば自分の体験ではなく、他人から聞いたこと、もっとひどい時はタイの新聞や雑誌に書かれていたことを、あたかも自分の体験したことのようにして資料として使っているのです。

タイにいた宣教師の中で、タイに7、8年しかいなかったのですが、タイでの経験をもとに宣教学のエッセイを書かれる方がいます。又、ある宣教師は初めから宣教学で学位を取るために宣教師とられました。ですから彼の興味、関心は福音宣教、教会を建てあげることよりも、宣教学の資料収集ということになっています。このような人は、どんどん本を書き、又文章を雑誌に投稿します。しかしタイ人の霊的必要や主の教会をタイに建てるため

の実際的なことには時間を費やしません。評価のところで言ったことですが、このように本国の人々に評価されるようなことを書き、本を出版する人は初めから本国を向いて仕事をし、本国で高く評価されます。しかし、宣教地では余り役には立たず、評価もされない人が多いのです。更にもっと困ったことは、書かれたことが事実とは違っているのに、本国ではタイと言えばそういうことだという理解が広まってしまうことです。よく日本人がアメリカに行って、アメリカ人に理解されている日本人が「サムライ、ゲイシャ」であってびっくりするようなことも、こういうことから起こってきているのではないのでしょうか。

私たち日本人宣教師たちも気を付けなければなりません。巡回報告の時に知らせることが、バランスのとれた宣教地の理解の助けになるかどうか考えて話さなければなりません。宣教地のバランスのとれた理解を持つには、私たち自身が日本のバランスのとれた理解を持つていくことが必要だと思います。

長々と話して参りました。29年間宣教師として宣教に携わらせて頂いて、一番強く感じておりますことは、神様の主権、Sovereignty of Godということです。不思議なことですが、神様は私の思いを越えて、私のような者を召し、クリスチャンにし、整え、備え、そしてタイ国へ、シンガポールへ、アジアの各地へと導き、東アジアに於ける宣教の業に係わらせて下さいました。主の憐れみ以外の何物でもありません。タイにいる間に、OMFの宣教師及び家族、全部で17人が殉教の死と事故死しました。私の仕えていたタイ人のクリスチャンも5人も事故死をしました。しかし、私たちは生かされ、今も主に仕えさせていただいています。ただ主の恵みと愛に感謝するのみです。ご静聴ありがとうございました。

宣教のパートナーシップを

日本ウイクリフ 永井敏夫

7月26日(月)から31日(土)の期間、東京都羽村市の聖書宣教会をお借りして開催された「みっしょんぼしぶる」についてご報告致します。今回は、アンテオケ宣教会、LMI世界宣教会、OMFインターナショナル日本委員会と日本ウイクリフの四団体の共催で行われました。参加者のみなさんの声をご紹介します。

* 宣教師の話を聞きたくて参加した。宣教への情熱をつかみたかった。各宣教師の証しで、「神さまがしてくださった。」という言い方が印象に残った。一つ一つのことは、神さまがなさったことであると示された。「神さまと一緒に出かけたいって、神さまのするわざを見るのはすごく楽しいのだろうな」と思った。



* 「主のみことばには力がある。」ということが心から実感できる日々。みことばが人々に本当に届いたとき、内側から変えられていくということがよく理解できた。自分が何もできないと落ち込む中で、主との交わりが深められ、そこから立ちあがって宣教の働きが進んでいった

という証しが、今の自分の姿に重なってきて、先生の気持ちがよく分かり、本当に感激し、涙がとまらなかった。

* 思っているだけでなく、行動している人々との出会いに励まされた。

* 喜んで働きをしている宣教師の方々の姿を見てうらやましくなった。神さまの御声をきちんと聞くという姿勢を学んだ。

* 神さまはユニークなお方であり、また言葉もユニークであることが分かった。喜んで宣教している人々がいることが分かりうれしくなった。継続して主に仕える姿と共に、支えのために祈りが本当に重要であることを教えられた。神さまを愛している心を持ち、神さまの導かれる所に進んでいきたい。



* 神さまと自分との関係を見つめる時期となった。私には示さないでという自分から、できることをしていきたいという思いに変わった。祈りを大切にしていきたい。

* 宣教師は雲の上の存在という思いがあった。交わりの中で、私にも何かできるのではないかという思いになった。

各宣教師の経験から出てくる個性豊かな数々のセッション。宣教地の必要を伝える熱きレポート、そして各宣教団体の成り立ちと働きの紹介など、盛りだくさんのプログラムでした。これに加え、今回は毎晩のエスニッククッキングもあり、夕食を一緒に作り舌鼓を打つ毎日でした。これからの世界宣教には「各団体間の信頼と協力が鍵」と信じ、このような輪が JOMA の他の団体にも広まっていくことを夢見ています。日本国内の宣教も、そして世界宣教も、互いの「パートナーシップ」から再出発をする時なのではないでしょうか？

加盟団体紹介

OM 日本 (オペレーション・モービライゼーション)

酒井信也

OM は、現在世界約 90 カ国で約 3500 名の宣教師・働き人が活動している超教派の国際的宣教団体。主要な宣教地を (1) 東西ヨーロッパ (2) 北アフリカ、中東、西・中央アジアにわたるイスラム圏 (3) インド・南アジアとして教会開拓を推し進める他、福音宣教船 (ドゥロス号、ロゴス II 号) でのユニークな伝道も行なっている。湾岸戦争でのクルド人難民救済を機に始まった人道支援活動もその後世界的に展開し、今や多くのイスラム圏および東南アジア諸国で物質的および霊的なホリスティック・ミニストリーとして働きを確立している。

この世界的な働きは、一人の婦人の祈りから始まった。米国ニュージャージー州のクラブ婦人は、地元の高校生が救

われ宣教師となるようにと15年間祈り続けていた。彼女はヨハネの福音書を家の前を通りかかったジョージ・パウワーという一人の高校生に手渡したが、それが全世界に及ぶ働きが始まりになるとは夢にも思わなかったであろう。この小冊子がきっかけとなり、ビリーグラハム伝道大会で献身した彼は、すぐに高校で同級生への伝道を始めた。その結果、地元で評判が悪かったこの高校で1年間に彼のクラスメイト200名が救われたのだ。

1957年夏、大学生だったジョージは、当時メキシコで福音があまり伝えられていないことを聞き、友人と共に1万冊のヨハネの福音書と2万冊のトラクトをトラックに積み込みメキシコへと向かう。1週間ですべての印刷物を配布し、翌年も同様の伝道をした結果、祈っていたキリスト教書店、ラジオ局と聖書通信講座が始められ、メキシコ人宣教師も与えられた。その後もメキシコ伝道は毎年続けられ、彼が学んでいたムーディー聖書学院から多数の学生が参加するようになる。

やがてこの学生グループの宣教のビジョンは、全世界の「閉ざされた」国々へと向けられた。1960年、彼はスペインへと移り住みヨーロッパでの働きを始める。スペインは当時独裁政権下で宣教活動が制限されていたが、手紙を通してヨハネの福音書と聖書通信講座を無償で提供するこの働きは最初2年間で2万を超える応答を得、多くの人々が救いに導かれた。しかしビジョンはさらに世界へと拡大していく。

1962年夏、100名の若者の参加を祈っていた西ヨーロッパ全域への文書配布伝道に200名が参加し、翌年には2000名の若者が3ヶ月間にわたる伝道活動に参加。8万あまりの町や村へ伝道を行なった。程なくこの動きはヨーロッパにとど

まらず、宣教の場は中東、西アジア、南アジアへと進展する。1964年、夏期伝道の後も200名の若者が残り宣教活動を継続。この年インドへ行った宣教チームによる文書伝道を通してインド人の働き人が起こされ、以後これが拡大し近隣のネパール、バングラデシュ、パキスタンへと波及。今やインドはOMの宣教地の中でも最多の千名を越える働き人を擁するまでに成長した。

イスラム圏への伝道も、OMの創成期よりジョージ・パウワー師や他のリーダーたちの長年の重荷、また祈祷課題であった。直接伝道の困難な中東や北アフリカ、西アジアでOMが宣教を始めて約40年。文書配布、交友伝道、聖書通信講座や人道支援活動などを通して数多くの人々が導かれ、教会開拓がなされている。

70年代に入りOMの世界宣教へのアプローチは、2隻の福音宣教船、ロゴス号とドゥロス号を有することでさらにユニークな側面を持つことになった。大量の文書と人員を乗せて世界各国に寄航するこの福音宣教船は、行く先々で歓迎され、寄港先の教会、また一般の人々に大きなインパクトを与え続けている。

日本でOMの働きが知られるようになったのは、70年代に初代ロゴス号が日本に寄港した時以来。日本からも船の働きに参加する人々が起こされ、福音宣教船の連絡事務所が設けられた。1992年にOM日本が発足。人々と教会に対し世界宣教に対する動機づけを行ない、宣教師を派遣し、長期・短期各種の世界宣教プログラムを提供している。過去多くの日本人が主に福音宣教船を通して短期(2年)の宣教訓練プログラムに参加してきた。近年は船だけでなく、ヨーロッパ、西アジア、中央アジアへの長期宣教師が起こされていることは感謝である。

JOMA主催セミナー 「宣教師と宣教団体の 危機管理について」

日 時 2004年11月5日(金) 10:30～15:00

場 所 御茶ノ水クリスチャンセンター 4階

10:30～12:00 基調講演

ロドニー師(OMアジア総主事)

13:00～15:00 パネルディスカッション

パネラー(OMFインターナショナル

日本委員会・アンテオケ宣教会日本

ウィクリフ聖書翻訳協会・イムマヌエ

ル総合伝道団)

*参加費無料、席上献金あります。

発 行: 海外宣教連絡協力会

発 行 者: 池原 三善

住 所: 244-0842

横浜市栄区飯島町2441-10

Tel.045-891-7769

Fax.045-894-2121

e-mail hongodaioffice@yahoo.co.jp

郵便振替:海外宣教連絡協力会

00160-7-106631